

- *「わたしの教えは、わたしのものではなく、わたしを遣わした方のものです。」「自分から語る者は、自分の栄光を求めます。しかし自分を遣わした方の栄光を求める者は真実であり、その人には不正がありません。」(ヨハネ7:16、18) 一般に「栄光」とは輝かしい誉れ、名誉、評価などという意味。イエスが語られることや教えはすべて父なる神から来たものである。イエスは父とわたしは一つであると主張して来ておられ、イエスご自身の栄光は決して求めず、常に父の栄光を求めておられる。神は真実なので、神の栄光ではなく自分の栄光を求める者は正しくない。ウェストミンスター大教理問答の第一問である「人間のおもな、最高の目的は、何であるか」の答えは、「神の栄光をあらわし、永遠に神を全く喜ぶことである。」人間の生きる目的は自分の中にはなく、人間の中にもない。私たちは誰でも、神のために、神の栄光をあらわすために生まれてきたのである。そのための模範がイエス・キリスト。主イエスは父の栄光を求めて話され、行われた。イエスのことを良く知り、この方に従っていけばよい。
- *「モーセがあなたがたに律法を与えたではありませんか。それなのに、あなたがたはだれも、律法を守っていません。あなたがたは、なぜわたしを殺そうとするのですか。」(7:19) あなたがた(ユダヤ人たち)はわたしを殺そうとしている。モーセの十戒「あなたは殺してはならない」を破っている、とイエスは言われる。なぜ殺そうとするのかのきっかけは、イエスが行われた一つの奇跡であった。ベテスダの池で38年間寝ていた病気の人を立てて歩かせた。それを安息日に行われたからである。しかし、ユダヤ人たちは安息日には働いてはいけないという大律法があるのに、その安息日に割礼を行っているのはどうしたわけか。「うわべによって人をさばかないで、正しいさばきをしなさい。」(7:24) イエスが行われたいやしは「人の全身をすこやかにする」ものであった。十字架上で流される血による新しい契約であり、永遠の魂の救いであった。旧約時代のさばきの基準は律法であった。律法や慣習に縛られていた人々は神の真のみこころに思い至らなかった。新約時代の基準は律法を超えた「愛」である。「神への愛」「人への愛」いずれもイエス・キリストが示してくださった。イエスにならいたい。